推薦書は日本文化の専門家に審査されますが、日本人ではありません。つまり、世界遺産委員会の多くの委員はほとんどサムライの事を知らないか、まったく知らないかのどちらかです。ですから推薦に当たっては、本当のサムライの文化とはどういうものなのか、もっと明確に説明しなくてはなりません。自然や文化、仏教などがどのようにサムライ文化を支えてきたのか、説明する必要があります。

キング　サムライは戦士と書かれたものが多く、教養・儀式・行動が信念や仏教に基づいているということはよくわかりますが、日本人でない人にとってはつながりが非常に分かりにくいところがあります。日本人ではない人から見た時に最初からどういう風に説明したらいいのか。世界遺産委員会に出すときに、自分は日本人だと考えずに日本人ではないという視点から、こうした文化を洗いなおしてみることが必要だと思います。

ル・ズー　サムライ文化も同じようにいろいろな側面があります。直面している問題というのは、どのように史跡と文化をつなげていくかということです。無形のものについて、どのようにいえばいいのかという側面もあります。無形のものと有形のものをどのようにつなげていくか。無形のものを有形でどのように表すかというのが今後の問題です。

◉市民参加

岡田　無形のものは世界遺産としての評価を受けにくいのですが、それが形になって寺社とか景観とどのように結び付くか。あるいはそれを舞台としてどのように日本的な文化が創出されてきたのか。その辺も注目していい点かと思います。市民の立場から世界遺産あるいは文化財全般に対する関わり方をご紹介いただきたい。

ヤング　英国では管理プランの協議会なども行われ、何百人もの人たちがたくさんのコメントを寄せ、私達はすべて考慮に入れて活動を続けてきました。これでもって世界遺産を守るというやり方です。英国にある古代ローマの城壁跡「ハドリアヌスの長城」では何か価値のあるものに、（落書きなどの）損傷など問題が生じると市民団体が問題解決のための計画を立てて、キャンペーンを行います。非常に効果的で、市民を関与させる方法です。

西村　非常に重要でいろいろな物事を決める時に、専門家だけで決めるのではなくて、さまざまな土地所有者とかいろいろなボランティア、日本でいえばＮＰＯとか、きちんとした形でものが言えたり、言うとそれがちゃんと議論の仕組みに乗ったりするような仕組みというのは、英国だけでなく先進国で発達していると思います。鎌倉には十分素地があるし、すでに十分行われているのかもしれません。しかし日本全体を見るとまだ少ないようです。

右から西村幸夫さん、稲葉信子さん、
左端はコーディネーターの岡田保良さん

右からクリストファー・ヤングさん、ル・ズーさん、
ジョセフ・キングさん

稲葉　2005年に白川村で世界遺産10周年のお祝いがありました。イタリア、フランス、フィリピン、そしてアフガニスタンのバーミヤンからそれぞれ世界遺産をもつ自治体の市長や知事を招いて、白川村の村長とともに市民参加とはどういうことか話し合いました。これからまさに世界遺産の保存のためのシステムを作っていかなければならないバーミヤンの知事は、それぞれの話を聞いた上で、しかしどこがよかったとか、そういうことは言わずに、ただ「いい勉強になった」とだけ。彼女が学んだことは、「何をしていくべきかは、自分がしっかり考えること」、そういうことだったのだと思います。世界遺産の仕事をやっていてよかったと思った時でした。

岡田　インフォーマルな形にせよ、いろいろなレベルでの対話をできるだけ絶やさないで深めていくことが大事です。ともすれば文化財の指定とか選定は、お上の仕事だというようなことから一歩抜け出して、市民の認識が深まったことは世界遺産の貢献と言えるのかなと思います。

（注）議論の中で主に外国人専門家が、「武家」とか「武家文化」とすべきところを「サムライ」とか「サムライ文化」で語っていました。正確には中世からの「武家」と江戸以降に定着した「サムライ」とはイメージが微妙に異なります。ですが外国で「サムライ」として「武家」が認識されていることも事実なので、本稿では発言通りに「サムライ」を使いました。

武家の古都 鎌倉塾

平成21年度春季講座第2回講演要旨

「浄光明寺―『浄光明寺敷地絵図』と慈光院跡・経塚の発掘調査―」

講師：特定非営利活動（NPO）法人　鎌倉考古学研究所　大三輪龍哉さん（浄光明寺住職）
とき：平成21年6月6日（土）　ところ：鎌倉生涯学習センター第5集会室

浄光明寺は、扇ガ谷の東側の支谷の泉ヶ谷にある。西が今小路、南は御成小学校、北に行くと亀ヶ谷があり仮粧坂に通じている。近隣には鎌倉五山である寿福寺や、英勝寺がある。昔はもう少し広いお寺で、その範囲は現在では国の史跡に指定されている。泉ヶ谷は、現在は扇ガ谷の一部だが、『吾妻鏡』の、「宗尊親王の方違えの本所がおかれたというのが初出の史料で、扇ガ谷より以前にその名を確認されている。かつては浄光明寺とならび多宝寺と言うお寺があり、何度も発掘調査されている重要な遺跡のある地域だ。

◎浄光明寺の歴史

創建は1251年（建長3）から1252年、建長寺より若干古い。5代執権北条時頼・6代執権北条長時の創建と伝えられる。実際には、長時が中心になったと考えられ、長時から始まる赤橋流北条家の菩提寺という位置付けでスタートする。創建当初から大寺だった。1296年（永仁4）1月に開山真阿は真了房に浄光明寺長老職を譲る。3ヶ月後に岩屋（窟）堂から出火、浄光明寺、多宝寺等がことごとく炎上した。9月、真阿和上が亡くなる。やがて復興が成り、1299年（正安元）北条久時の発願により現在の本尊の阿弥陀三尊像が造立された。11年後の1310年（延慶3）安養院から火が出て鎌倉中に広がり、浄光明寺と多宝寺が炎上している。しかし再び復興し、1313年（正和2）石造地蔵菩薩像（網引地蔵）等が造られている。1314年（正和3）、浄光明寺にいた僧侶如仙高恵らが真言並びに四宗興隆を発願し、極楽寺・多宝寺・金沢の称名寺とか鎌倉近郊の大きいお寺の僧侶が署名しており、お寺同志のコミュニティの存在が窺える。

新田義貞の鎌倉攻めにより北条守時が自害、鎌倉幕府は滅亡したが、浄光明寺はその後も後醍醐天皇、足利尊氏、徳川家康等、時の権力者の安堵を受け今日に至る。

◎「浄光明寺敷地絵図」の発見

「浄光明寺敷地絵図」の大きさは縦63.5㎝×横95.5㎝。上杉重能の花押から年代は1333～1335年（元弘3～建武2）の間、幕府滅亡により不安定になった寺領を認めてもらう目的で描かれた。宝物として浄光明寺で大切に保管されていたが、明治初めに行方不明になり、平成12年に発見された。

鎌倉内部の土地利用が分かる貴重な史料である。寺の周辺には『御中跡』『守時跡』等武家屋敷跡がある。石井進先生は、「『御中跡』は北条得宗家の谷地で、この時代では北条高時邸跡、その隣の『守時跡』は赤橋流北条守時邸跡であろう」と言われている。

◎慈光院跡及び経塚の発掘調査

境内は三段のひな壇状になっているが、その二段目の平場で、昭和62年に慈光院跡の発掘調査が行われた。現在の仏殿や収蔵庫の建っているあたりだ。中世遺構は岩盤に直接掘られた建物遺構で、礎石据え方31基。桁行四間、梁間三間半、半間の柱間があるのはこの建物の特長的な部分で、奥に仏壇、その手前に内陣、それを取り囲むように外陣がある。14世紀前半に建立され、後半に廃絶されたとみられ、火災の痕跡はない。建物の雨落ちや平場全体の排水のための溝が切ってある。その溝の一部をつぶす形で方形の落ち込みが掘られ、後ろに蓮華の花が掘りこまれたやぐらがある。

経塚の出土状況

平成13年、絵図にある経塚の調査のため、お稲荷さんの真下を掘ったが何も発見されず、すぐ傍を掘ると常滑の大甕が出てきた。高さ95㎝×胴部最大径95.5㎝。経塚の外容器ではないかと思われる。

絵図と発掘調査結果をどうみるか。絵図では慈光院は東地区と西地区に分かれている。東地区には開山塔と呼ばれる五輪塔の収まったやぐらがあり、先代住職（故大三輪龍彦さん）の調査未発表資料では、五輪塔の水輪の上部に入っていた曲げものに「開山真聖国師の遺骨なり」と書かれていた。総括すると、東地区は浄光明寺の公的空間、西地区は守時持仏堂など北条氏の私的空間と考えられる。

このように、浄光明寺は文献・考古・絵図からも寺史を探ることが出来る稀有な寺である。北条氏や足利氏と密接な関係にあり、中世鎌倉を代表する大寺の一つで、武家の古都・鎌倉を象徴する寺院の一つと言える。